「母のブラウス」

福山啓子

登場人物
太田照子（８４歳）アルツハイマー。下半身麻痺
加藤邦子（５７歳）照子の娘。パートタイマー。一階で照子と同居。
太田明彦（６３歳）照子の長男。大学教授。二階に住む。
斎藤あかり（３０歳）明彦の娘。妊娠中。

第一場

六月、朝９時。二世帯住宅の一階、照子の寝室。エアマットを敷いた介護用ベッド、車椅子、テレビがある衣装の入ったクリヤケース、衣装かけ、大きな紙オムツの袋などが雑然と置いてある。
テレビの音が低く流れている。明りが入ると、照子がベッドに寝ており、邦子がその前に後ろ向きに立って、摘便の作業をしている。右手にビニールの手袋を二枚、左手に一枚している。（作業は半ば象徴的に行う）
（以下、邦子はぞんざいで事務的な会話、照子は穏やかだが若干不安気。）

邦子　（照子の腹を撫でながら）いきんで、もっと。
照子　痛！　痛いよ撫でると。
邦子　（摘便を続けながら）どこ？　中？　表面？
照子　なんでこんなに痛いんだろう。…出ないよ今。
邦子　出てるよ、いっぱい。
照子　へえ。
邦子　こんなもんか。

邦子は照子の尻を拭くと、拭いた布をゴミ箱に捨て、便のついたパッドを部屋に付属した便所に持って行き、便のみ流す。パッドを丸めてゴミ箱に捨て、ビニール手袋を一枚外して捨て、オムツの取り換えにかかる。

邦子　窓の方向いて。

照子は自分では動けないので、邦子が動かすままになっている。
明彦が入ってくる。

明彦　お、すまん。（出て行く）
邦子　…テレビの方向いて。

邦子は半ば手荒くオムツをはめ、服を着せる。

照子　ありがと。ありがと。もういいよ。

邦子はかまわず作業を続け、コルセットをはめる。

邦子　窓の方向いて。
照子　いらないよそんなの。
邦子　今日はデイサービスの日だからやらなきゃダメなの。
照子　え？
邦子　今日は火曜日だから。こっち向いて。
照子　聞いてないよ。
邦子　毎週行ってるよ。
照子　そうなの？
邦子　椅子に移るからね。

コルセットをつけ終わると、邦子は照子を抱え、腰の回転を使って手早く車椅子に移す。

照子　重いでしょ。
邦子　そうでもないよ。

明彦入ってくる。

明彦　（やさしく）おはよう、お母さん。
照子　おはよう。
明彦　どう、このネクタイ。派手かな。
邦子　いいんじゃない、明るくて。

ゴミをまとめて持って退場

明彦　いい？
照子　うん。
明彦　よし。今日はいい天気だね。
照子　そう？
明彦　（車椅子の向きを変えて）ほら。
照子　いい天気だね。…あれは何？　あの白いの。
明彦　白いの？
照子　白い花が沢山咲いてるよ。
明彦　梅の木のこと？
照子　梅？
明彦　もう実がついてるよ。
照子　へえ。今何時？
明彦　えーと、９時になるとこだよ。
照子　９時！　朝の？
明彦　そうだよ。
照子　もうお昼かと思った。

邦子、戻ってきてデイサービス用のバッグを椅子の背にぶらさげる。

明彦　白い花ってなんだろう。
邦子　え？

明彦　白い花が咲いてるって。
邦子　ああ、葉っぱが光ってんのがそう見えるんじゃない。
明彦　ああ…。ちょっとさ、相談があるんだ。いい？
邦子　もうすぐデイのお迎えがくんのよ。
明彦　あ、そうか。何時に？
邦子　９時の予定なんだけど。（車椅子を鏡台の前へ。ヘアブラシで照子の髪をとかす）

玄関のチャイムが鳴る。

邦子　来た来た。（車椅子の向きを変える）
明彦　（照子に）デイサービスの車が来たって。
照子　え？　何？
邦子　デイサービスだよ。（車を押して退場しようとする）
邦子　ちょっと待って、ちょっと。
照子　（照子の方にかがみこんで）何。
邦子　

照子、邦子のブラウスの襟を直してやる。

邦子　ああ。（車を押す）
照子　どこ行くの？
邦子　だからデイサービスだって。火曜日だから。
照子　へえ、驚いたね。（退場しながら）

明彦、見送ってから、テレビを消す。ベッドの布団をきちんと直す。サイドテーブルの汚れをティシュで拭いて捨てる。ちょっと考えて、隅にあった小さな折りたたみ椅子を拡げて置き、自分はベッドに腰掛ける。
邦子が入ってくる。

明彦　（邦子の来ている服を指して）それ、前お袋が着てた奴だっけ。
邦子　そうだよ。
明彦　ぴったりだな。
邦子　ちょっと袖が短いんだけどね。
明彦　ふうん。ま、どうぞ。
邦子　何？（座る）
明彦　あかりのことなんだけどさ。
邦子　ああ、いつだっけ？　予定日。
明彦　七月二十日。
邦子　どうなの、調子は。
明彦　おう、順調順調。もう胎動も始まってさ。
邦子　へえ。
明彦　ぐにぐに動いてるとか言ってたよ。
邦子　（笑って）どう、おじいちゃんになる気分は。
明彦　まだ実感わかねえな。出てきてみないと。
邦子　男の人はそうかもね。
明彦　まあな。…それで、さ。子供が生まれると、あのアパートじゃ手狭になるんだよな。
邦子　ああ。
明彦　しばらくは、ま、大丈夫だと思うんだ。近いからまあ良子がちょこちょこ通って面倒みて。
邦子　うん。

明彦　でも、先を考えるとな。で、あかりがこっちに帰ってきたいって言うんだ。
邦子　はあ。
明彦　つまり、ここ。（あたりを指す仕草）
邦子　へ？
明彦　一階を、あかりたちに渡す。か、あるいはあいつらが二階に行って俺たちが下に降りてくるかだけど。どうかな。
邦子　ばあちゃんは。
明彦　そこなんだよな。でさあ、いろいろ俺も考えたんだよ。
邦子　……。
明彦　お前もいろいろ大変だろ？　パートの仕事もあるしさ。今夜までやってるんだろ。
邦子　うん。
明彦　毎日ヘルパーさん頼むのも限界あるしさ。ここは思い切って施設を探すのも手かなと思うわけよ。
邦子　……。
明彦　知り合いが千葉の方にいい施設があるっていうんだ。
邦子　千葉！
明彦　キリスト教系の施設で、お父さんが入っててすごく良くしてくれたんだってさ。今度一度行ってみようと思ってるんだけどね。都内は高くてな。やっぱり。
邦子　……。
明彦　どう思う？
邦子　…ちょっとさあ、…それってひどくない？
明彦　え。
邦子　いきなりさあ。
明彦　悪い悪い。でもいい機会だろ。
邦子　何が。
明彦　いろいろ考えてみるにはさ。
邦子　あのねえ。兄貴だよ？　最後まで家で面倒みようって言ったの。
明彦　うん。
邦子　だから私がずっと面倒見てきたわけじゃん。仕事やめて。
明彦　うん。
邦子　それを今になって…。
明彦　それはほんとに感謝してるんだよ。邦子が頑張ってるから俺も良子も安心だし。
邦子　だったら最初っから施設にいれちゃえば良かったじゃない。
明彦　……。
邦子　これじゃなんのために仕事やめたんだか…。
明彦　うん、いや、無理にってことじゃないんだよ。まだ決めたわけじゃないんだから。
邦子　当たり前だよ。
明彦　……。
邦子　お姉さん？　そういうこと言うの。
明彦　いや、俺。俺だよ。
邦子　でも二人で相談したわけでしょ？　この間「もう私も退職だからこれからもっとお手伝いできます」って言ってたのにねえ、お姉さん。
明彦　わかった。（立つ）やめよう。今日はおしまいにしよう。
邦子　（立つ）ちょっと。言いだしといて途中でやめないでよ。いい機会でしょ？　そうなんでしょ？
明彦　そう感情的になるなよ。
邦子　なるよ！
明彦　（座る）……。
邦子　兄貴もお姉さんも学校の先生だから、どうせ私なんて美容師ったって店持ってるわけじゃない

明彦　し、私がやるのが一番いいと思って今まで、確かにボケてはきてるけどさ、ここが自分のうちだかなんだかもわかんなくなってるし、一分たったら言ったこと忘れちゃうし、昔のことも今のこともわかんなくなって、テレビと現実の区別もつかなくなってるけどさ、でも私の顔見りゃなんとなく身内だってわかるし、兄貴の顔みりゃ息子だってわかるわけでしょ？　これから赤ん坊が生まれたら…ひ孫だよね。

邦子　……

明彦　かわいそうじゃん、千葉なんて。行ったら行きっぱなしでしょ、そこでご臨終なわけでしょ。

邦子　時々帰ってくることはできるよ。

明彦　車で何時間かかるの、無理だよ、あの年で。

邦子　家族は泊まることもできるんだ。

明彦　行きやしないって。行けないでしょ。一年に何回？　足遠のいちゃうよ。無理無理、絶対。（座る）

邦子　…あのなあ。

明彦　何。

邦子　この間、夜十時に俺が家帰ってきて、なんとなくおふくろの所覗いたらさ、ベッドの背がこう上ってて、食事の台との間にくしゃっとはさまってて、味噌汁とかご飯とかひっくり返っててさ。

明彦　……。

邦子　良子と俺で全部着替えさせて。

明彦　あれは、敏彦に頼んどいたのよ、ばあちゃんのご飯後始末頼むねって。あいつが…。

邦子　いや、そのことを責めようってんじゃないんだよ。お前も大変なんだろ？　敏ちゃんの学費稼ぐんで夜も仕事入れたんだろ？

明彦　……

邦子　結局寝かせっぱなしになるんだったら、見守りがある方がいいんじゃないの、おふくろだって。

明彦　……

邦子　もう十分頑張ったよ。親父が死んでから、…もう十年経つもんな。

明彦　……

邦子　俺も最初は、最後まで家で見てやりたいって思ったけど、俺たちもだいぶ年取ったし、俺は前に腰やってるしな。そろそろ考えていい時だと思うわけよ。

明彦　…じゃあさ。じゃあ……私と敏彦はどこ行きゃいいの。

邦子　あかりといれかわりでアパートへ入ったら。大家には話しておくよ。なんなら引越し代出してもいいよ。

明彦　……。

邦子　まあ今すぐってわけじゃないから。ちょっと考えてみてくれよ。な。じゃ、俺学校行くから。

明彦　…待って。

邦子　悪い、もう時間ないんだ。

明彦　ちょっとだから。

邦子

（明彦立ち止まる。）

邦子　ねえ、ばあちゃんを施設に入れる金ってどうするの？

明彦　え。貯金あるだろ、母さんの。

邦子　何百万てかかるんでしょ。

明彦　それは調べてみるよ。たぶん…。

邦子　敏彦の学費。

明彦　え？

邦子　当てにしてたのよ。ねえ、今施設に入るんでお金使っちゃったら、遺産分けで私の取り分減っちゃうってことだよね？　困るんだけど。

明彦　遺産分けしたろう、親父が死んだ時。
邦子　あんなものもうないわよ。女手一人で子ども育ててんだから、こっちは。そこ考えてよね、お願い。
明彦　そりゃ違うんじゃないの。母さんの貯金だぜ？
邦子　そうよ。
明彦　だったら母さんのために使うのが筋だろう。
邦子　なら、今まで私が母さんの面倒みてきた分、計算して金払って。ヘルパーとか頼んだらいくらになると思う？　当然もらっていいわけよね、私が。そうでしょ？
明彦　ちょっと待てって。
邦子　さっきは感謝してるって言ったじゃない。
明彦　それとこれとは…。
邦子　別だっての？　冗談じゃないよ。感謝は形で示してよ、ちゃんと。
明彦　……わかった。考えておくよ。（出て行く）
邦子　（追いかけて）ちゃんと考えてよ。ね？　でなきゃ私だって…。

邦子部屋へ戻り、うつむいて考えているが、顔をあげて室内を見回す。鏡台の引き出しを開けて真珠の首飾りを取り出すとポケットにいれる。その他、衣類や装身具を風呂敷に包みながら次のセリフを言う。

邦子　全く勝手なんだから。年収一千万もあるくせに、ケチ！　施設！　今頃！　だったら働けたじゃない…。そうだ、その分も計算しなきゃ。（手を止める）通帳出せっていうかな？　見られたって…（また物色を始める）ぜいたくしてるわけじゃなし、ちょっとくらい使わせてもらったって…。もっと使っておきゃよかったんだ、ほんとに。

風呂敷は満杯になる。邦子はふと鏡台に移る自分の姿を見て、襟に手をやる。頬に手をやる。間。やおら風呂敷をひっくり返し、うずくまってうめく。
暗転。

第二場

前場から一週間後。前場と同じ部屋。朝。低くテレビの音。ベッドで背もたれを起こし、食事をした後の照子、薬を飲ませようとしている邦子。

邦子　口開けて。（いっぺんに数種の薬を口にいれる）薬だからね。みんな飲んじゃって。（水を飲ませる）かまなくていいんだよ。（照子は薬をかむ）薬だから。噛んだっていいけど。（また水をやる）飲んだ？（照子カプセルを口から出す。邦子それを手で受け）出しちゃだめだよ。これカプセルだから。これも薬なの。飲んで。（口に入れて水を飲ませる）飲んだ？
照子　固いね。
邦子　だから噛まなくていいの、おなかの中で溶けちゃうから。飲んで。（水をやる）飲んだ？
照子　うん。

邦子は食事の盆を片付ける。あかりが入って来る。

あかり　おはよう。
邦子　お、来たの。
あかり　もうご飯済んだの？
邦子　すんだよ。

あかり　おばあちゃんおはよう。あかりだよ。
照子　あかりなの？
あかり　そうだよ。
邦子　赤ちゃん出来たんだよ、あかり。ほら（腹を示す）
照子　へえ！
あかり　よく動くんだよ。触ってみて。（照子の手を取って腹にあてる）どう？
照子　……
あかり　わかんない？
照子　赤ちゃんいるの？
あかり　うん。生まれるんだよもうすぐ。
邦子　ひ孫だよおばあちゃん。ひ孫。
照子　ひ孫？
あかり　そうだよ。
照子　驚いたね。
あかり　驚いた？
邦子　楽しみだね。
照子　うん。
邦子　どれどれ。（腹に触ってみる）パンパンだね。寝られないでしょ、仰向きで。
あかり　そー、お腹横に置いて寝る感じ？　つらいよー。
邦子　もうちょっとだよ。
あかり　早く楽になりたいよ。
邦子　出てきたらきたで大変だよ。（片付け、照子の顔を拭く、背もたれを倒すなどしながら）
あかり　そりゃそうだけど。
邦子　拓くんは手伝ってくれるの？
あかり　うん、掃除とかお料理とか。
邦子　お料理してくれるんだー、いいね。
あかり　拓は上手だよ。それくらいやってもらわないと。
邦子　まだ仕事見つからないの？
あかり　うん。てかあまり真面目に探してないというか。
邦子　困るじゃない。父親になるのに。
あかり　うん。でも当面は私が働けばいいかなと思って。生まれたら拓が面倒みるって。
邦子　育メンか。
あかり　そう。
邦子　それもいいかもね。
あかり　うん。あんまり急いで決めなくてもいいかなって。

邦子は食器の盆を持って出ていく。照子は眼をつぶっている。

あかり　テレビ見てる？　おばあちゃん。
照子　うん？
あかり　眠い？
照子　うん。
あかり　テレビ消す？
照子　うん。

あかりテレビを消す。邦子入ってくる。カーテンを閉める、エアコンの調節をする、布団をなおすなどの作業をしながら以下の会話。

邦子　寝ちゃった？
あかり　うん。
邦子　今日は眠いみたいだね。
あかり　……あのね、おばちゃん。
邦子　ん？
あかり　この間お父さん、ここに私が引っ越してくるっていう話したでしょ。
邦子　あー、うん。
あかり　私さあ、一応公団申し込んであるんだ。
邦子　…公団？
あかり　うん。今のとこだと狭いことは狭いってか、拓がね、やっぱ自分の部屋が欲しいみたいなの。
邦子　ふん。
あかり　子供が大きくなったら手狭だしさ。だから公団申し込んでみたの。当たるかどうかわかんないけどさ。
邦子　そうなんだ。
あかり　そのこと言わなかったでしょ、お父さん。
邦子　うん。
あかり　ずるいよね。おばちゃんとしてはさ、やっぱ親は子どもが面倒みるべきだって思ってるわけでしょ。
邦子　まあね。
あかり　当然だよね。お父さんもひどいと思うよ。さんざん世話になっといて今頃施設にいれちゃおうなんてさ。息子の風上にもおけないっていうか。
邦子　うーん。（苦笑）
あかり　おばちゃんが仕事大変なのに頑張ってるのにさ。ごめんね。私ももっと手伝えば良かったんだけど。
邦子　まあしょうがないよ。
あかり　アパートだって近いんだからさ…。前ね、お母さんにね、私もおばあちゃんのお世話手伝おうかって言ったら「おばちゃんが最後まで　面倒見るって言ってお世話してるんだから、あんたが横から余計なことするんじゃない」って言ったんだよ。

邦子あかりの顔を見る。

あかり　どう思う？
邦子　……ふうん。（世話に戻る）
あかり　なんかおかしいよね。私だってほんとはもっとおばあちゃんのお世話したいんだよ。下の世話だってなんだって教わったらやれると思うんだ。家族みんなで面倒見るのがほんとだよね。
邦子　まあね……。
あかり　私がこっちに戻ってきたらそうするよ。拓も協力してくれるし。お父さんお母さんにもやってもらって、みんなでおばあちゃんを看たらいいと思うんだ。どう？
邦子　え？
あかり　そうするとおばちゃんも楽になるでしょ。
邦子　ちょっと待って、公団申し込んだって言ったよね。
あかり　そうだよ。だから無理にってことじゃないんだ。公団は何度も申し込んでいればそのうち当たると思うから。でもみんなで近くに住んでおばあちゃんの面倒見れるんだったら、その方がいいと思わない？
邦子　え、じゃ私と敏彦は？
あかり　私の今のアパートと交換するの。二人なら全然大丈夫だから。新しいからきれいだし、こっから近いし、日当たりもいいんだよ。二階だから。
邦子　えー…。

あかり　やっぱり嫌？
邦子　いやっていうか…。急に言われてもねえ…。
あかり　だよね。でも、赤ちゃん生まれたらさあ、喜ぶと思わない？　おばあちゃん。子ども大好きだもんね。
邦子　ちょっと考えさせてくれる。敏彦とも相談しないと。
あかり　だよね。急にいろいろ言ってごめんね。もー、お父さんが余計なこと言うから、私も頭がワーッてなっちゃって…。でもいろいろ考えるとそれが一番いいんじゃないかと思って。高いお金出して施設入れたりするよりかはさ。
邦子　お父さんお母さんがウンって言うかな。
あかり　私が説得するよ。大丈夫だと思う。私が公団申し込んだって言ったらお母さん動揺してたから。
邦子　うん？
あかり　なんか勝手に決めてって怒ってた。勝手はお母さんだよね。こっちはちゃんといろいろ考えて決めてんのに。「二人じゃ無理でしょ」とか言っちゃって。…結局孫を近くに置いときたいって　こと？
邦子　ふん。
あかり　ね、ね、どう思う？
邦子　今すぐ返事しなくていいんでしょ。
あかり　うん。考えといてね。

間。あかり窓から庭を見る。

あかり　このお庭もっときれいにしようよ。
邦子　え？
あかり　草ボーボー…。今度拓に草むしりやらせるよ。植木屋さんも頼まないとね。いっつもいつ頃切るの？
邦子　夏だね。これからだよ。
あかり　ふーん。ねえ、真ん中芝生にするのどう？　そうすると子どもが遊んだりできるじゃん。バーベキューしたりさ。もっと庭らしくしようよ。
邦子　お金かかるよ。
あかり　お父さんに出させるよ。…あの梅の木邪魔だなあ。
邦子　（ぎょっとして）梅の木？
あかり　正面のやつ。
邦子　え、どうして。
あかり　あれだけ出っ張ってるんだもん。なくてもいいんじゃない。苔びっしりついて気持ち悪いよ。地球温暖化のせいかな。
邦子　だって紅梅はあれ一本しかないんだよ。
あかり　裏側うろになってるし、台風とかで倒れそう。あぶないじゃん。
邦子　今年もよく咲いたじゃない。
あかり　そうだっけ。
邦子　あれ切っちゃったらおばあちゃん寂しがるよ。思い出の木だから。
あかり　そうかな。まいいや今は。じゃあね。考えといてね。

あかり出ていく。邦子椅子にどさりと腰かける。

邦子　まったくもう…。

間。邦子庭を見る。ベッドに近寄って眠っている照子に声をかける。

邦子　お母さん…ねえ、私がいなくても平気？　いなくてもいい？　ねえ。
照子　うん？
邦子　あ、起きちゃった？　ごめん。
照子　私は平気だよ。
邦子　……。
照子　一人でも行けるから平気。邦子は無理だろうね。
邦子　私？
照子　え？
邦子　私が？
照子　違う違う、邦子。
邦子　邦子は私。
照子　違うよ。小さい方の邦子。
邦子　邦子は一人。
照子　そうなの？
邦子　そうだよ。何の話してるの？
照子　旅行の話でしょ。
邦子　旅行の話なんかしてないって。
照子　行かないの、旅行。
邦子　行かない。
照子　おかしいね。

邦子テレビをつける。二人ぼうっと見ている。少しの間。邦子立ち上がり、

邦子　じゃ、私仕事行くからね。お昼はヘルパーさん来てくれるから。
照子　何時に帰るの？
邦子　夕方一度帰るよ。テレビつけとく？
照子　いや。
邦子　消す？
照子　うん。

邦子テレビを消す。荷物をまとめる。

邦子　じゃね。（ドアへ向かう）
照子　歌が聞こえる。
邦子　え？
照子　ほら。男の合唱だね。
邦子　歌なんか聞こえないよ。
照子　聞こえるよ。
邦子　いっつも聞こえてるの？
照子　なかなかうまくならないんだね。どこで歌ってるんだろう。はーれーたーるーあーおーぞーらー、はーれーたーるーあーおーぞーらーって、ちっとも先に進まないんだよ。
邦子　へえ。
照子　聞こえない？
邦子　うん。
照子　耳が悪いんじゃないの。
邦子　…かもね。じゃ、出かけるわ、私。